

“The Dance”における「わたし」の謎

山 本 博

(1)

“The Dance”はフィッツジェラルド（F. Scott Fitzgerald, 1896-1940）が1926年6月に雑誌*Red Book*に発表した短編である。この作品は、フィッツジェラルドが商業雑誌に発表した数ある短編の中で唯一のミステリーという特徴をもつ。内容は南部の小さな町を訪れた女性主人公が、カントリー・クラブで行われたダンスパーティーで起きた殺人事件を解決するというものである。

“The Dance”はフィッツジェラルドが生前刊行した4つの短編集には収録されていない。Matthew J. Bruccoliが1973年に編集した*Bits of Paradise*に収録されたが、以後主要作品とは見なされず、どの短編集にも選ばれることはなかった。しかし、2014年になってSarah Churchwellが*Forgotten Fitzgerald*と題する短編集を刊行し、収録された12編の中にこの作品は含まれている。Churchwellは、この12編を収録した理由を、「わたしの趣旨は、これらの作品は未発見の傑作だというわけではない—しかし再発見するに値するというものだ」（13）と述べている。本稿は、“The Dance”を読み直して見えてきた幾つかの問題を、フィッツジェラルドの代表作*The Great Gatsby*（1925）との関連で考察するものである。

まず“The Dance”の設定年代に注目しておく必要がある。フィッツジェラルドがこの作品を実際に執筆したのは1926年1月頃であるが、作品の舞台は1921年の事件として設定されている。これは*The Great Gatsby*の設定年代1922年の1年前ということになる。これがなぜ問題なのかというと、

Churchwellも指摘しているが、フィッツジェラルドの長編と短編はしばしば「連携して (in tandem)」(2) 作られることが多いからだ。「その結果、両者は文体的、主題的、構造的に互いに似る傾向にある」(2)。“The Dance”も“Winter Dreams”や“Absolution”などと同じく*The Great Gatsby*と「連携」する作品の1つではないか、というのが本稿の主題である。

“The Dance”は南部の小さな町Davisを舞台に展開する。裕福な北部の娘で物語の語り手「わたし」は、叔母が住むこの町に滞在しているうちに、Charley Kincaidという男性に魅かれるが、彼はMarie Bannermanという女性と婚約をしていることを知り、New Yorkに帰ることにした。その2日前の土曜日の夜、9ホールのゴルフコースを備えたカントリー・クラブのダンスパーティーで事件は起きる。ダンスの終わった夜の11時半、舞踏会場で出し物が披露された。オーケストラに合わせてCatherine Jonesという女性が、「わたし」が見たこともない激しいソロ・ダンスを踊ったのだ。見物客のアンコールに応じて演奏を再開したオーケストラ・リーダーにCatherineが平手打ちを食わせ、場内が一瞬静まり返った時、一発の銃声が出た。2階の女性用更衣室で喉を打たれて死んでいたのはMarie Bannermanだった。2階はゴルフバッグなどを置くクロークルームを中央に、女性用更衣室と男性用ロッカールームが両側にあり、どちらの部屋もクロークルームを通らなければ1階には降りられない構造になっている。ほどなく、銃声のした時刻に男性用ロッカールームにいたCharley Kincaidが逮捕された。ディナーの後「わたし」が間違っただけで開けた部屋でBannermanとJoe Cableが密会し、抱擁しているのを、Kincaidは見失ってしまい、その後2人が激しく口論していたことは会場に来ていた多くの人が知っていた。その上現場はKincaid以外は侵入することが不可能な半密室であった。だが凶器として使われた町のシェリフの45口径拳銃はどうしても見つからなかった。このような状況下で、「わたし」はふとしたことから「真犯人」の仕掛けたトリックを見破り、「真相」を解明する。釈放されたKincaidと「わたし」は結婚し、1年後新婚旅行先でゴルフをしているときに「わたし」のゴルフバッグの中から凶器の拳銃が出てき

た。犯行時刻をごまかすために、死体の第1発見者のAfrican-Americanのメイドが「犯人」に命じられた通りに、オーケストラの演奏が止んだ時、窓から外に向けて発砲し、銃をクロークルームの「わたし」のゴルフバッグに放り込んだのだ。警察の捜査の前に「わたし」は自分のバッグを持ち帰っていたので見つからなかったのだ。

“The Dance”は、シェリフが拳銃をクロークルームに置きっぱなしにして舞踏会場に長時間いたというような不自然さはあるものの、トリックや犯人の意外性によってミステリー特有の‘Who done it?’というパズルの興味を満たしている。しかし単なるミステリーには収まらない特徴がこの作品には幾つかある。その一つが、当時国民的熱狂となっていたジャズダンスの1種チャールストンの採り上げ方である。「真犯人」のCatherine Jonesが踊るダンスを「わたし」は次のように表現している。

I had never seen anything like it before, and until five years later I wasn't to see it again. It was the Charleston – it must have been the Charleston. I remember the double drum-beat like a shouted ‘Hey! Hey!’ and the unfamiliar swing of the arms and the odd knock-kneed effect. She had picked it up, heaven knows where (90).

「5年後」の現在（1926年）にいたるまで見たことがないダンスだったと「わたし」は言う。しかし、「チャールストンは第1次大戦前に起源があり、全員黒人のブロードウェイ・ミュージカル*Runnin' Wild*で特集された後、1924年に最盛期を迎えた」（261）と風俗史*New world Coming*にはある。チャールストンを広めたJosephine Bakerがブロードウェイ・ミュージカル*Shuffle Along*でデビューしたのが1921年で、パリの*La Revue Nègre*でチャールストンを披露して一躍スターになったのが1925年であった。チャールストンをもともとジャズ演奏に合わせて黒人が踊る高度なソロ・ダンスであったが、「動きを単純化して、白人も踊るようになったことで」（マリカ224）、爆発

的な人気が出て、1926年に「ボールルーム・ダンスとして承認される」(クレイン&マックレル 299)という経緯がある。だから、「5年後(1926年)まで1度も見たことがない」という「わたし」の言葉には疑問符が付くということを念頭に置く必要がある。

では *The Great Gatsby* においてダンスはどのような表現を与えられているのか。第6章、Gatsbyのパーティに現れたDaisyとGatsbyが踊る場面があり、それを語り手のNickが次のように描写している。

Daisy and Gatsby danced. I remember being surprised by his graceful, conservative fox-trot—I had never seen him dance before (106-107).

2人が踊ったのはフォックス・トロットで、Gatsbyの優雅で控えめな踊り様にNickは驚いている。フォックス・トロットももとは動きの激しいダンスで、1913年 African-American のボードヴィリアン Harry Fox が踊ったことでこの名がついている。爆発的に流行したのは1914年とされる。この時代の風俗史 *Daily Life in the United States, 1920-1940* に次のような記述がある。「第1次大戦までに新しいダンスが絶えず紹介された。フォックス・トロット、タンゴ、そしてターキー・トロット、ケーキウオーク、カンガルー・ディップなど、幾つものつかの間人気の出たダンスは、溢れんばかりの足と肉体の動きを伴った。その多くがアフリカン・アメリカンのダンス形式を中産階級の白人社交界にもたらした」(205-206)。GatsbyがDaisyと踊ったのはボールルーム用に一般化されたフォックス・トロットであろう。フィッツジェラルドは、1922年が舞台の *The Great Gatsby* にはチャールストンを登場させていない。

もうひとつの“The Dance”における特徴とは、主人公である「わたし」の奇妙な性癖ともいべき地方の小さな町に対する「過剰」な恐怖心である。「わたし」は小さな町には、「古い憎しみ、忘れられていない事件、影のようなスキャンダルや悲劇が、死ぬことができずに、外面的な生活の自

然な引き潮と上げ潮ともつれ合って生き続けている（…old hatreds, old and unforgotten affairs, ghostly scandals and tragedies, seem unable to die, but live on all tangled up with the natural ebb and flow of outward life）」（81）と述べる。そして「わたし」が訪れた南部の小さな町で「一瞬表面が裂けて、野蛮で異常で恐ろしいものが頭をもたげるのを見た（…I once saw the surface crack for a moment and something savage, uncanny and frightening rear its head）」（82）と語る。「わたし」にとって「小さな町」とは、古くからの歴史があり、「古い家柄が存続し、たとえそれぞれが零落していても、誇り高い小さな貴族社会を形成している（…the older families and their kin form a proud little aristocracy, even when individually they have sunk to destitution）」（83）ところということなのだろう。

このような表現が何度も繰り返される反面、人物、特に男性登場人物の描写が極端に少ないという「過小」な表現的特徴もある。最初に容疑者として逮捕され、「わたし」の事件解明により釈放され、「わたし」と結婚するCharley Kincaidには、実は発話が一言もない。作品の重要人物の一人であるにもかかわらず。また、Catherine Jonesの恋人で、Marie Bannermanと密会しているところを見られ、殺人事件の原因となったJoe Cableにいたっては発話はおろか、ダンスパーティー出席者としての次の簡単な説明以外一切言及はない。

There was Joe Cable, the son of the former governor, a handsome, dissipated and yet somehow charming young man;…（84 省略は引用者）.

さらに、殺人の凶器となった拳銃を盗まれた町のシェリフBill Abercrombieは、事件前ダンス会場で出席者の質問に答えて一言発話しているが、それは別の事件のことであった。2か月後、「わたし」がAbercrombieを訪ね解明した「真相」を説明した時も、彼の発話は全くない。

唯一まともな発話を与えられている男性がオーケストラのリーダーで

African-AmericanのThomasである。「わたし」は彼を訪ねて話をし、Catherineの踊ったダンスは彼のオーケストラで1週間前にリハーサルしたこと、死体の第1発見者のカントリー・クラブのメイドKatieは彼の妹で、Catherineが学校に上がるまで彼女の「子守 (nurse)」(98) をしていたことを聞き出す。そして帰る途中で、「わたし」がCatherineの異性関係を尋ねた時、「連れ (my companion)」(98) の次の発話で、「わたし」は「真相」が閃くのだ。

'Off and on. She only likes people for a day or so at a time. That is - all except¹ Joe Cable' (99 イタリックは引用者).

つまり、Thomasの発話は、Katieとの親密な関係と、Joe Cableに対する強い思いから、Catherineの「犯行動機」を導き出し、「わたし」の推理に根拠を与えるために必要なのである。一方先に挙げた3人の男性は記号としてしか存在していないと言っていい。こういう事情が、先に挙げた「過剰」と「過小」のそれぞれの表現を目立たせ、このミステリーが3人の女性（「わたし」、Catherine Jones, Marie Bannerman）のドラマであることを際立たせる。

ところで、この3人の女性の性を入れ替えて男性とすると、*The Great Gatsby*の主要な登場人物に酷似することに気付く。物語の語り手であり、Kincaidが婚約していると知って身を引く決心をする「わたし」は、やはり語り手であり、「欲望にブレーキをかけてしまう (act as brakes on my desires)」(59) Nick Carrawayとそっくりである。またJoe Cableにひたすら思いを寄せ、「わたし」の叔母からは、「新参者で卑しい ('new and common')」(89) 一族と軽蔑され、ジャズ演奏に合わせてCharlestonをソロで踊るCatherine Jonesは、貧しい農民の息子から成り上がり、Daisy Buchananを追い続けて、自身の豪華なパーティでオーケストラに*Jazz History of the World* (50) をリクエストするJay Gatsbyによく似ている。さらに、Kincaidという婚約者がありながら、平気でJoe Cableと密会するMarie Bannermanは、Daisyという妻がありながら、Myrtle Wilsonという

愛人をつくっている上流階級のTom Buchananと相似である。

*The Great Gatsby*で殺されたのはGatsbyであったが、“The Dance”では、Gatsbyに相当するCatherine Jonesが「殺人者」であり、殺されたのはTom Buchananに相当するMarie Bannermanであった。これもひとつの逆転現象であるといつてよいだろう。

1920年6月11日早朝、ミステリーを凌駕するような事件が起きた。New Yorkの高級アパートで、ブリッジの名手として知られ、裕福なJoseph Elwellが頭部を撃たれ死亡しているのを、通いのメイドが発見した。現場は密室状態で、凶器の45口径軍用拳銃は見当たらなかった。この事件は被害者が著名人であり、現場の特異性と相まって人々の興味を引き、数か月間連日報道されたが、今日に至るまで未解決になっている。この当時フィッツジェラルドは妻Zeldaとロングアイランドにほど近いコネティカット州ウエストポイントで家を借り、新婚生活を送っていた。「必然的にフィッツジェラルド夫妻は頻繁にニューヨークへ小旅行をしていた」（Brucoli 144）ので、新聞報道を通して事件のことは当然知っていたであろう。この事件現場の様子は、“The Dance”のBannerman殺害現場とよく似ている。被害者が女性である点、撃たれた箇所が喉である点など相違するところもあるが、銃声時Kincaid以外は入室不可能な半密室で、凶器が45口径拳銃で現場から消失しているなど主要な部分は一致している。“The Dance”は、よく知られたこの事件現場を素材に、フィッツジェラルドが独自の解釈と意図を盛り込んだと考えられる。

“The Dance”が*Red Book*に掲載されてから4か月後の1926年10月に、Scribners社からElwell事件を下敷きにしたミステリー *The Benson Murder Case*が刊行された。著者S. S. Van Dineは巻末の注でElwell事件に言及しているⁱⁱ。

実はフィッツジェラルドのミステリーはもう1作存在する。1909年、フィッツジェラルドが13歳の時、*The St. Paul Academy Now and Then*（October, 1909）に掲載された“The Mystery of the Raymond Mortgage”である。John

Kuehlがフィッツジェラルドの習作時代の作品を集めて編集した*The Apprentice Fiction of F. Scott Fitzgerald, 1909-1917*に収録されているので読むことができる。この作品は、フィッツジェラルドにとって初めて印刷されたもので、当時の大変な喜びようをKuehlは、Turnbullの評伝を引用して紹介している。ただし、ミステリーとしては幾つかの致命的な欠点もあり、作家自身も他の研究者もその後選集に収録することはなかった。だがフィッツジェラルドの作家としての出発点がミステリーであったということは留意しておいてよい。

一方*The Great Gatsby*も、実際に起きた殺人事件がモデルになっているとする研究がある。Sarah Churchwellは*Forgotten Fitzgerald* (2014) の出版の1年前に*Careless People—Murder, Meyhem and the Invention of The Great Gatsby* (2013) という著書を刊行している。この著書は、*The Great Gatsby*の成立には1922年9月16日に実際に起きた殺人事件が深く関わっていると、フィッツジェラルドの当時の生活、評伝、書簡、新聞記事、作品の進展状況などを綿密に考証し、作品と事件の関係を跡付けたものである。それは、Hall-Mills事件として知られている。ニュージャージー州の小さな町で男女二人が頭部を撃たれ、並んで横たえられていた殺人事件で、男性は牧師、女性は聖歌隊員で、二人とも既婚者でありながら愛人関係にあり、あたりには女性からのラブレターが粉々になって散乱していた。この事件は当時の世間や新聞紙上を何か月にもわたって賑わせ、今日に至るまで、やはり未解決となっている。

Churchwellは著作の中で、1923年4月のニューヨークタイムズの特集記事を紹介している。「今まで書かれたどんな探偵小説よりも、Elwell事件やHall-Mills事件ほど想像力を刺激するものはなかった。これらの事件は数か月にもわたって連日各紙の1面を飾った。記事は恐怖でぞくぞくさせる探偵小説のように読まれたのだ。しかし、事件解決の章が欠けている」(294-295)。またChurchwellは、「*The Great Gatsby*はジャズエイジの魅力と輝きを教える権威のある指針だと誰もが知っているが、*Gatsby*を満たしている世界は、おそらく我々が認識しているよりもはるかに暗く異様なものである」(4)と

指摘し、さらに、「Gatsbyの死はGeorge Wilsonの 人違いによるものとしばしば説明されるが、実際はTom Buchananの嘘が原因なのだ。彼は、Nick Carrawayの大叔父が南北戦争に身代わり兵を送って死地に追いやったように、Gatsbyを自分とDaisyの身代わりにする」（307）と述べる。これは“The Dance”を理解するうえで、示唆に富んだ言葉である。

(2)

“The Dance”において、最も奇妙なのは「わたし」である。「わたし」には名前がない、というより、名乗らない、年齢も言わない。他の人物、KincaidやCableは、一言も発話がなくても名前が与えられているのに。廣野由美子が一人称小説を論じた著書の中で、「一人称小説を読むと、たとえ違和感を覚えつつ批判的に見るにせよ、とにかく語り手『私』に焦点を合わせて読むように誘導される仕組みになっている」（7）と述べるように、“The Dance”は恣意的な眼と化した「わたし」の主観がすべてを支配する。

「わたし」はこのミステリーにおいて、語り手であると同時に探偵である。通常ミステリーにおいては、事件を解決する「探偵役」とその活躍を冷静に描写する「語り手」（ワトソン役）が存在する。フィッツジェラルドが習作時代に書いた“The Mystery of the Raymond Mortgage”においても、探偵役（新聞記者John Syrel）と語り手（警察署長Mr. Egan）は分離して存在していた。“The Dance”においては、探偵と語り手が一体化することによって、読者はニューヨーク育ちの富裕な娘の視線と偏見で物語を見ることになる。それは例えば次のような、Kincaidとの関係を語る「わたし」の言葉に現れる。

We'd been drawn together from the first because he was almost the only boy in town who'd gone *North* to college, and I was still young enough to think that America revolved around *Harvard and Princeton and Yale* (83 イタリックは引用者).

おそらく Kincaid は上記引用のアイビーリーグ (Ivy League) といわれる植民地時代からある名門大学のどれかを卒業したのでであろう。(1920年代当時、上記の大学はまだ共学ではなかったので、女子である「わたし」が入学したはずはない。) ここで「わたし」は、通常東部といわれる上記大学の所在地を「北部」と表現している。これを「わたし」が訪れている南部の小さな町の紹介と併せて読むとある意味が浮かび上がってくる。

Davis — *that is not its real name* — has a population of about twenty thousand people, one-third of them colored (82 イタリックは引用者).

一見客観的紹介に見える上記引用文だが、「わたし」は実際の町の名をあえて伏せて Davis と呼ぶ。Davis からすぐに連想されるのは南北戦争当時の南部連合の大統領 Jefferson Davis (任期: 1861-1865) である。フィッツジェラルドは第1次大戦中のある時期、アラバマ州モントゴメリー (後に妻となる Zelda の故郷) 近くの Camp Shelidan で中尉として任務に就いていた。評伝を書いた Andrew Turnbull はこの駐屯地を次のように紹介している。「キャンプ・シェリダンはモントゴメリーの近隣にあった。その町でジェファーンソン・デイヴィスが就任式を行い、最初の南部連合の旗が州議会議事堂に翻った」(82)。歴史に強い関心を示すフィッツジェラルドは当然この事実を知っていたはずだ。“The Dance” で殺害される被害者の名が Bannerman (旗手) であることも意図してのことだろう。つまり、上記2つの引用を合わせてみれば、この作品には南北戦争に勝利した北部人の富裕階級の若い娘の眼差しが影を落としている。

それがよく表れているのが、この町では当たり前存在である African-American に対する微妙な「わたし」の視線である。ダンスパーティーにやってきたシェリフの Abercrombie に青年が小声で何かを訊いたので、「わたし」がその若者に尋ねたところ、‘nigger case over in Kisco’ という応えで、今湿地帯に隠れているとのこと。もし見つけたらどうするのかとさらに「わたし」

が尋ねると、‘Hang him, I guess’ (86) という返答が返ってきた。事件直後疑われたのもその ‘nigger’ であった。

That a ‘nigger’ had shot and killed Marie Bannerman was the instant and unquestioned assumption—in the first unreasoning instant, anyone who doubted it would have been under suspicion (92).

Churchwellは*Forgotten Fitzgerald*の序文の中で、「1926年当時のアメリカ白人社会の差別主義が嘆かわしいのはもっともだが、フィッツジェラルドは良かれ悪しかれその時代の代表なのだ」(15)と述べて、現代では禁忌とされるniggerという言葉、「括弧 (inverted commas)」(15)付きながら使ったことに苦言を呈している。Churchwellは「フィッツジェラルドが人種に対する自身の態度を十全に再吟味したのは後年になってからだ」(15)と指摘しているが、それがこの作品では括弧付きの ‘nigger’ という言葉の使用となって、「わたし」の微妙な視線の揺れを産んでいる。つまり、奴隷解放を大義名分に南部と戦った北部人と富裕な白人上流階級の娘という、相矛盾する視線である。作品のプロットとは直接関係のない事件を挿入することで、南部社会における当時のAfrican-Americanの置かれた状況を描くと同時に、安全で優位な立場にいる「わたし」の偏見に無自覚な眼差しが ‘nigger’ という表現にはある。それは事件の進展とともに次第に明らかになる。

2か月たった7月、Katieの自供により事件は解決し、判決が下った。「わたし」が偶然開けてしまった部屋で密会していたBannermanとCableを見て、Catherineは「2人の秘密の情事は行きすぎだと判断したようだ (… but evidently she had determined that his clandestine affair with Marie Bannerman had gone too far)」(100)と、「わたし」は考える。さらに、拳銃をもって脅したのはBannermanの方だというCatherineの法廷での証言に「わたし」は疑問を投げかける。

…and there again there is a certain obscurity for Catherine always claimed that Marie got the revolver, threatened her with it and that in the ensuing struggle the trigger was pulled (101 省略は引用者).

つまり、「わたし」は、拳銃を持っていたのはCatherineの方で、Joe Cableと密会していたBannermanを許せなかったのだと言いたいようだ。だから陪審員が下したCatherineに対する5年の実刑判決に「わたし」は不満を隠さない。

In spite of everything I always rather liked Catherine Jones, but in justice it must be said that only a simple-minded and very exceptional jury would have let her off with five years (100).

しかし、これは「わたし」の飛躍した主観的判断である。Catherineが2人の密会現場を仮に一瞬垣間見たとしても、それはディナーの後、ダンスの始まる直前であった。この後ただちに殺人計画を立ててシェリフの拳銃を盗んでBannermanが来るのを待っていたというのだろうか。彼女は自分の出番に備えて着替えや化粧に忙しかった。第一「わたし」はCatherineのギンガムの舞台衣装の修繕を手伝って30分も女子更衣室に一緒にいたではないか。(…and so I sat down and worked on her dress for half an hour) (88).すでに階下のボールルームではダンスが始まっており、Bannermanが更衣室に入ってくることなどCatherineには予測できなかったはずだ。(Then Marie chanced to come into the women's room while Catherine was dressing for her dance…) (101). だから陪審員は、事件後の工作は問題があるものの、概ねCatherineの言い分を認め、もみ合っている中での銃の暴発事故だと判断して5年の実刑判決を下したのだと考えられる。殺人であれば通常狙わない首の銃創がそれを物語っている。

Marie BannermanとJoe Cableの密会現場を「わたし」が見た直後、

Bannermanが更衣室に入ってきて（A few minutes later Marie Bannerman entered the crowded dressing room）（87）, 「わたし」に口止めをした（‘You won’t say a word, honey, will you?’）（87）。このときBannermanが『ほかに誰が見たの？（‘Who else was it that saw us?’）』（87）と、気になることを言った。「わたし」は一緒にいたKincaidのことだと思ったが、Bannermanは別の「人影（a figure）」（99）を一瞬見たのだ。「あれはCatherine Jonesだったのかも知れない（…that might have been Catherine Jones）」（99）、と後日「わたし」は気付く。Bannermanは、扱い方のわかっているKincaid（‘But, honey, I know how to handle him’）（87）よりも、Catherineのことが気になったのだろう。だからAbercrombieの拳銃を拝借して、更衣室に入りCatherineに口止めをするために脅した、と考えるほうが「自然」ではないだろうか。

Catherine JonesはDavisではどのような存在なのか。「わたし」の叔母Musidoraに言わせれば『最下層からの成り上がり（‘the bottom rail had gotten to be the top rail now’）』（89）と軽蔑を隠さない。以前彼女が請われて当時流行のダンス、シミー [‘shimee’ (then the scapegrace of jazz)]（89）を踊ったときも、管理委員会を悩ませ、『緊張しすぎて自分が何をしているか全くわかっていない（…‘so tight she didn’t know what she was doing anyhow’）』（89）と酷評された。しかしCatherineはAfrican-Americanやその文化に対する親近感を隠さない。アンコールを嫌ってThomasを平手打ちしたことも後日謝りに来て（And a few days later she had come to him and said she was sorry）（98）、和解しているし、プロのダンサーになるつもりでニューヨークでレッスンも受けている。（Somebody had told me that she wanted to be a dancer - that she had taken lessons in New York）（88）。チャールストンを踊った際も、CatherineはAfrican-Americanになりきって踊っていた。

…looked out at us with rolling eyes and a vacant negroid leer. She began to dance (90 省略は引用者).

このようなCatherineに対してDavisの上流貴族階級の人たちがどう考えるかは明らかだ。「わたし」の叔母Musidoraと同じ侮蔑の視線を向けていたはずだ。だから、Kiscoで問題を起し沼地に隠れている‘nigger’を『狙い撃ちしてやりたい（‘…Like to have a shot at him myself’）』（85）と言うシェリフのAbercrombieと同質の感情で、Bannermanは拳銃を持って更衣室に入ったのではないだろうか。

Catherineに厳しい眼を向ける「わたし」だが、Kincaidについてはどのように考えていたのか。Catherineのダンスの後、「わたし」は2階のクロークルームに保管していたゴルフバッグをウェイターに取りに行かせた。これは明後日の月曜日にニューヨークに帰ることにしていたからだろう。（I was leaving on a Monday）（84）。しかし、事件直後Kincaidが逮捕されると「わたし」は予定を変え、Davisに残った。その後、Kincaidに対する忠誠心も消えてからの（…after the first wild surmises, the first burst of unreasoning loyalty to Charley Kincaid, had died away, …）（94）、5月から7月までの2か月間、Davisに留まり続けたのはなぜか。その間「わたし」は1度もゴルフをしなかったのか。もししていれば凶器の拳銃はもっと早くみつかったはずだ。小さな町の恐怖をあれほど強調しているのにも関わらず、この不可解な「わたし」の態度に一切説明はないし、語られない。

「わたし」が事件解決の糸口を見つけたのは、Catherineがアンコールの要請に応えず、演奏を始めたオーケストラのリーダー Thomasを平手打ちしたことに、「不自然さ」を感じたことを思いだしたからだった。（It wasn't natural—or, more important, it hadn't *seemed natural*）（78）。では、Kincaidがずっと2階の男性用ロッカールームにいたことに「わたし」は「不自然さ」を感じなかったのだろうか。「わたし」は次のように地元の新聞 *Courier* の記事を紹介する。

Why had he chosen to remain in the locker room during the dance?

No reason at all. He was tired. He was waiting until Miss Bannerman

wanted to go home (95).

Kincaidはまったく事件に関与していなかったのか。少なくとも事件現場の一番近くにいた彼には2発の銃声は聞こえたはずだ。特に2発目は演奏が止んだ静寂の中で発砲され、階下のボールルームでは悲鳴すら拳がったのだから。(One of the chaperons gave a little scream, …) (91). 彼は現場に駆けつけることもしなかったのか。『誰かが外で猫でも撃っている（‘some one was potting cats outdoors’）』(95) と思ったというKincaidの述懐を載せた記事を「わたし」は紹介するのみだ。

Churchwellが、「*The Great Gatsby*の最後で、ロングアイランドの舞台を汚した複数の殺戮には3通りの解釈がある」(316)と指摘したように、“The Dance”においても「わたし」の解決とは異なる「真相」が潜んでいる可能性がある。解決の決め手となったKatieの自白も、拷問に近い苛烈な尋問によるものだ。

I was right—as everyone now knows, but for a week, until *Katie Golstien broke down under a fierce and ruthless inquisition*, nobody believed me (100 イタリックは引用者).

かくして北部の裕福な娘である「わたし」は、北部の名門大学を出たCharley Kincaidを奪還して結婚し、奴隷州からなる南部連合を北軍が打ち破るという南北戦争の構図が完成する。ダンス名の由来となったサウス・カロライナ州の同名の町「チャールストンは、南北戦争開戦のきっかけとなった砲撃のおこなわれたところであったⁱⁱⁱ」。

5年前の記憶を辿って選ばれた「わたし」の語る言葉からかえって多くの謎と矛盾が顕在化する。平林美都子は著書中の「自伝と不確定な記憶」という項の中で次のように述べる。「記憶として書いている現在の自分は、過去の出来事を体験した自分より多くの経験を経ているし、なによりもその出

来事がその後どう進展するのか行く末を知っているのである。現在の語り手が過去の未熟な自分を装うのであれば、その語りには隠蔽という騙りが含まれることになる」(16)。1926年は、Nick Carrawayという、言動に多くの議論を呼んでいる「語り手」が語る物語 *The Great Gatsby* が刊行された翌年である。その記憶がまだ生々しくある中でフィッツジェラルドが、小説における「語り手」の問題を、ミステリーという形でより一層純粹に探求しようとしたのが“The Dance”ではないだろうか。

注

ⁱ *Forgotten Fitzgerald*: 版では expect となっているが誤植であろう。*Bits of Paradise* 版では except (154) と表記されている。

ⁱⁱ S. S. Van Dine は原注で、作中の事件より Elwell 事件の方が後だとして、時間的には逆の形で言及している。

Even the famous Elwell case, which came several years later and bore certain points of similarity to the Benson case,……

ⁱⁱⁱ 日本文に相当する箇所の英文を以下に引用する。

From the coast, Sherman marched northward; by February 1865, he had taken Charleston, South Carolina, where the first shots of the Civil War had been fired.

引用文献

American Center Japan. “The Civil War and Reconstruction.” 9 January 2018. <<https://americancenterjapan.com/aboutusa/translations/3481/>>.

Brucoli, Matthew J. *Some Sort of Epic Grandeur: The Life of F. Scott Fitzgerald*. New York: Harcourt Brace Jovanovich, Publishers. 1981.

Churchwell, Sarah. *Careless People: Murder, Mayhem and The Invention of The Great Gatsby*. London: Virago P. 2013.

Dine, S. S. Van. *The Benson Murder Case*. Read Books. 2013. 72.

Fitzgerald, F. Scott. *The Great Gatsby*. New York: Charles Scribner’s Sons. 1925.

—. “The Mystery of the Raymond Raymond Mortgage.” *The Apprentice Fiction of F. Scott Fitzgerald: 1909–1917*. ED. John Kuehl. New Brunswick: Rutgers UP. 1965.

17-27.

—. “The Dance.” *Bits of Paradise: 21 Uncollected Stories by F. Scott and Zelda Fitzgerald*. ED. Scottie Fitzgerald Smith and Matthew J. Bruccoli. London: The Bodley Head. 1973.

—. “The Dance.” *Forgotten Fitzgerald: Echoes of A Lost America*. ED. Sarah Churchwell. London: Abacus. 2014.

Kyvig, David E. *Daily Life in the United States, 1920-1940*. Chicago: Ivan R. Dee P. 2002.

Lowth, Marcus. *Top 10 Unsolved Mysterious Murders from the Early 1900s*. (April 12, 2016). 9 January 2018. <<https://listverse.com/2016/04/12/10-still-unsolved-mysterious-murders-from-the-early-1900s/>>.

Miller, Nathan. *New World Coming: The 1920s and the Making of Modern America*. Cambridge: Da Capo P. 2003.

Turnbull, Andrew. *Scott Fitzgerald*. New York: Charles Scribner's Sons. 1962.

Wiser, William. *The Crazy Years - Paris in the Twenties*. New York: Atheneum. 1983. 157-59.

クレイン, デブラ & マックレル, ジュディス 『オックスフォード バレエダンス辞典』

鈴木晶監訳, 赤尾雄人・海野敏・鈴木晶・長野由紀訳, 平凡社, 2010年.

平林美都子 『「語り」は騙る—現代英語圏小説のフィクション』 彩流社, 2014年.

廣野由美子 『一人称小説とは何か—異界の「私」の物語—』 ミネルヴァ書房, 2011年.

マリカ 『ジャズダンス —誰が踊りをつないだか—』 有学書林, 2012年. 209-25.

